鬼

吉田淑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼

【Ｎコード】
Ｎ９５６７Ｆ

【作者名】
吉田淑子

【あらすじ】
神戸美智雄のこころには鬼が棲んでいる。小さい生き物を切り刻んでは喜んでいる。成長するにつれ、鬼は鳴りをひそめたと思われたが、ふいに愛しい後輩の首の断面を愛撫したくなるのだった。

第一話

神戸美智雄の心には、鬼が棲んでいる。自覚はあった。

小さい頃から動物や蟲を切り刻んで遊ぶのが好きだった。子どもの時分は程度の差こそあれ、そういう遊びを経験するものだけれど、美智雄のそれは倫理や道徳というものを飛び越えていた。蛙とトカゲの首を切り離して、交換してくっつけたりした。凶器など持たない幼い美智雄の唯一の凶器は自らの爪だった。爪を常に長く伸ばして、器用に解体作業を行った。

青白くひ弱な美智雄の、その妖怪じみた行動を咎める者はいなかった。美智雄は村で唯一の資産家の一人息子で、彼の悪い噂をすればたちまちはじき者にされるためだ。そのため美智雄は、村の大人はもちろん、子どもからもなんとなく距離を置かれていた。彼こそがつまはじき者だった。

けれど美智雄は、その奇行を除けば頭のいい少年だったし、資産家の息子らしく青白い肌に上品な仕立ての服が似合う美しい子どもだった。

「僕は化学者になりたい。そして不死の生き物を作るんだ」

そう囁くのはいつも切り離した首だった。未だ眼が輝いているもの、舌を出しきったもの、生々しい血がこびりついているもの、様々の首に話しかけた。

美智雄の話を聞くのは、この種々の生首だけだった。切り刻んだ愛らしい者どもが口をきいたらどんなにかかわいいことだろう！少年の思考は残酷ながら純粋だった。

美智雄のその癖は幼少のほんの僅かな時期だけで、あとはごく普通の子どもに戻っていった。かつての奇行を覚えているのは自分だけになった。

父にはろくに会ったことがない。母親は何かと美智雄の成すことが気に食わないとなじった。
母親の愛情はねじくれていた。そうやって美智雄を突き放したくせに、美智雄が小学校を卒業して、少し男らしい体つきになると、突然年増女のいやらしい目線をくれるようになった。思春期らしい潔癖さでそれを気持ち悪いものと感じ、知らずに母を避けるようになったが、母は蛇のような執拗さと狡猾さを持っていた。
「美智雄ちゃん、背中を流しましょうねぇ」
こう言って風呂場に入られたときは、羞恥から頭がぐらぐらとした。そして母は美智雄の、細く骨ばった、しかし若々しい筋肉の張り詰めている裸体を見てため息をついた。いやらしく頬を染めた。
母、今となっては単なる女だが、その女は「旦那様」と呟いて、美智雄の青い果実のような肉体を思う様舐め尽くした。女の枯れた指先はざらついて、異様な興奮に熱くなっていた。これまでにない羞恥、これまでにない恥辱だった。僕は汚された！メスの獣に柔躙され征服され、まるで人形のように転がされた！
美智雄はかつての友人を思い出す。生首だけのそれ。自分もまた、母にそのようにされたのだ。首を切られたのだ。懐かしい思い出の獣どもと一緒に、自分の生首が転がっているのを見た。
「旦那様、わたしは悪い女です。ねぇ、打って。その逞しい腕で、馬にするようにわたしを打って！」
女の絶叫にいよいよ怖ろしくなり、固まっていた美智雄は力を振り絞って女を突き飛ばし、自分の部屋へと逃げた。あとは机に突っ伏してガタガタふるえていた。その日、生まれて初めて射精というものを体験したけれど、美智雄にはこれの意味がわからなかった。ただただ、闇雲におそろしかった。
心に棲む鬼は再びその姿を現した。美智雄は実験と称して、幼い頃より残酷に動物を切り刻むようになった。幼い頃より分別がついていたから、それらが他人に悟られることはなかった。

やがて、成績の優秀だった美智雄は、高等学校に進学した。全寮制であるこの学校では、ようやくあの女のおぞましい支配から逃れることができた。そこでは友人と普通に付き合い、やがて卒業してW大学に進学すると、美智雄はひとりで貧しい下宿生活を始めるのだった。意地でも家に帰りたくなかった。

そこの下宿で知り合った人物に、宮野康平というひとつ年下の少年がいた。岡山の出身で、少々訛りがあることを気にしているなかなかの美少年で、美智雄はこれをことさらかわいがっていた。彼とは、他人である気がしなかった。よく、知らぬ人から兄弟だと間違えられた。すっかり仲良くなり、銭湯に一緒に通ったり、勉強を教えたり、互いの部屋を行き来したりする仲になっていた。

ある日の銭湯帰り。木枯らしの吹く寒い夜だった。静謐な夜の温度。白い息が現れては消えていった。

「宮野くんは頭がいいらしいね。W大学なんかに進学しないで、帝大にいけばよかったのに」

「そんなことありません。僕には、帝大はおえんです」

「おえん？」

「ああ、僕の国の訛りで……いけない、とかそういうことです。僕のような田舎もんに、帝大は行けません」

「それを言うなら、僕もおえんな」

「真似をしないでください。……美智雄さんは、都会の人じゃないですか」

「僕も、下総の村の出身さ。幸い訛りが強い地方ではなかったがね」

「関東だったら、都会です」

「そうかい」

美智雄は、自分の故郷の緑豊かな情景を思い出して微笑んだ。かわうそが顔を洗う川。ひたすら続く山道。あそこが都会だとしたら、

大抵のところは都会だろう。
　東京の冬は、茨城の寒さと何も変わらなかった。密集した建物で細切れになった風のせいでよけいに寒く感じるくらいだった。かじかんだ手に息を吹きかければ吹きかけるほど寒さはいよいよ増した。隣の宮野の頬は真っ赤になっていた。
「寒いですね。下宿で酒でも飲みましょう。僕、隠してあるんです。とっておきの虎の子」
「それは素敵だ――どっちの部屋で飲む？」
「僕の部屋、散らかってます」
「そう、じゃあ僕の部屋においで」
　そう言うと宮野は黙って頷いた。美智雄はそれを見て目を細めた。自分は、この少年のためにやさしくなれる気がする。鬼は、この子の傍にいれば現れない。

　すっかり裸になりかけている銀杏から、葉が一枚二枚と落ちていった。それは昨日から降り続いた雨で出来た水溜りに波紋を起こした。

「美智雄さん、僕です。康平です。お酒持ってきました」
「そんなに大きな声で言わなくても大丈夫だよ」
　彼の生真面目さに苦笑して戸を開くと、宮野の生真面目な瞳と目が合った。
「いらっしゃい。僕の部屋もそんなに片付いてはいないけれど」
「そんなことありません。美智雄さんの部屋はいつも片付いてるなあって、他の連中も言ってます」
「そうだね、僕は少し女みたいに潔癖なところがあるから」
　大事そうに一升瓶を抱えた宮野を中に入れる。格好などおかまいなしに、首に無造作に手ぬぐいを巻いている。
「寒くはない？　今ストーブ入れたからね」
「石油ですか」

「そう」
「すごいなあ。美智雄さんはなんでも持ってる。僕は未だに火鉢だってのに――」
「うん、なに、田舎から勝手に送ってくるのさ」
当時のストーブはまだまだ贅沢品、学生の美智雄が使うには不相応だったが、勝手に送られてくるものだから勝手に使っていた。
「さ、ストーブで暖まったら、次は君の自慢の虎の子で暖まるとしよう」
「僕の田舎も、ストーブくらい送ってくれるといいんですけど」
「なに、酒を送ってくるなんて気が利いてるじゃないか。コップを持ちなさい、お酌してあげよう。それとも熱燗にする？」
「熱燗は、すすんでしまっていけないので……」
「では冷やのまま頂こう」
宮野のコップになみなみと注いでやる。美智雄のコップにも宮野が注いで、酒盛りが始まった。
「見たまえ、宮野くん。いい月だ。春でないのが残念だが」
「月下独酌――李白でしたっけ」
「そう、李白は酔っ払いだが、自分と、影と、月とで晩酌をした。なんてことを詩に書いて後世に残すんだから風流なもんだね」
もうあまり話もしなかった。安い部屋は隙間風が吹いてヒュウヒュウ言っていたし、窓はガタガタ鳴っていたがそれもあまり気にならなかった。
李白は、自分と月と影とで、三人の晩酌であると言った。今もきっと三人だろう。自分と、宮野と、月とで――いったいどちらが影だろうとは考えもしなかった。言うまでもなく自分であろうと美智雄は感じていた。そうでありたいと願っていた。宮野の後ろにそっといる、影でありたかった。
「美智雄さん、僕もう帰ります」
一升瓶を、二人で半分も片付けただろうか。不意に宮野が声を上げた。彼の頬は来たときのように赤くなってしまっていた。

「酔っ払ってしまったの？」
「ええ、頭がふらふらする」
「泊まっていきなさい。一人は危ないから」
「でも」
「僕は構わないんだよ」
宮野は頷いた。それは肯定だった。彼は酔って、壁にもたれて眠り始めた。
「宮野くん、風邪をひくから……少しだけがまんしなさい。すぐに布団を敷くからね」
ふと、彼の首筋が目に入った。ほんの少し色づいたそれ。
美智雄は、ここまでやましい心を彼に感じたことは微塵もない。しかし、彼を介抱するうち、彼の首筋に噛み付きたくて仕方がなくなった。

思い出す。昔の友人ども。かわいいものを見つけると、すぐに首を切っていたあの頃。あの頃の美智雄は鬼だった。黙っているものが美しかった。

薄い肩を抱くと、呼吸が伝わる。何かわからない言葉を呟いている。美智雄は、このかわいい生き物が自分の傍にずっといれば、と思った。首を切って、その切断面を愛撫してやりたかった。

――鬼がまた、美智雄の心に入り込んだ。

宮野は、何かが割れる音で目を覚ました。
「美智雄さん……」
「宮野くん、すまないね、コップを割ってしまった」
そこには、手を血だらけにしている美智雄が立っていた。すっかり酔いも覚めて、宮野は彼に近寄った。
「すまないが、やっぱり帰ってくれないか……」

「美智雄さん、何を……」
「帰ってくれないか！」
普段、声を荒げたことのないような美智雄の、尋常でない様子に唖然として、宮野は何も出来なかった。美智雄はふらふらと血だらけの腕のまま、机に突っ伏した。
「美智雄さん」
「いいから、早く帰ってくれ。そして、忘れるんだ。君は今日、何も見ていない。いいね――」
宮野は後ろ髪を引かれながら、自分の部屋へと戻っていった。あのまま部屋にいれば殺される――なぜか本能的にそう察した。

美智雄は一人残された部屋で、血の匂いにまみれて、久々に恍惚を味わっていた。あの頃の、残酷な、けれどどこか甘やかな記憶。背徳感に襲われながら射精をした。

宮野の話

僕は昔から、そういう趣味――男を好む性質の男――に、よく好かれていた。僕自体はまったくなんの取り柄もない田舎者だが、彼らはどうしてか、僕に言いようもない魅力を感じるらしいのだった。

だから、神戸美智雄が僕のことを好きだというのは、十分に自覚していた。僕はとうていそういった趣味を理解する気にはなれなかったが、彼はとても金持ちで秀才だったから嫌いじゃなかった。彼は僕に尽くしてくれる。良くしてくれる。だから一緒にいたのだ。

しかし、彼の妙な性癖については、前から気付いていた。ある日、彼の専攻している生物学の研究室へと遊びに行くと、彼は血走った目をして、脇目も振らず、只管その生き物（たぶん、大きさからして鼠だったように思う）を切り刻んでいた。僕の専攻は生物学ではないから、鼠の解剖の仕方など知らないし、彼が純粋に研究でそれを行っていたのかもわからない。ただ、僕にはそれはとても学術的なものとは思えなかった。研究というのは、もっと事務的な、無機質なものではないだろうか。あんなにいやらしい、情念のこもったものではないのではなかろうか。彼はきっと、あの肉塊を口に入れても平気だろう。彼の切り刻む様は、熱烈な愛撫にも似ていた。きっと彼自身は気付いていないのだろう。その凄まじい情念と視線に。

僕は確かにそのとき恐怖を覚えたが、その感覚が自分にさえ向かわなければいいと思っていた。彼は金持ちで優秀で、そして美しいのだ。彼は美青年だった。まったく僕には喩えようもないくらいに。男色趣味はないが、密かに憧れてはいた。そして、僕は彼を連れまわすこと、その様子を羨望の眼差しで見る級友どもに優越感を抱いていたのだ。

しかし、そのプラトニックでいながら決して健全ではない関係は、やはり長くは続かなかった。彼が本性を見せたあの日。僕が酒に酔っていい気分でいたのを、目を覚ませばあたり一面血だらけだった。

彼自身の血であった。彼の、その姿は鬼に見えた。あの目、あの血走った目。僕は彼に殺される幻影を見た。彼の長い指が僕の首にまとわりついて、親指に力が込められると、僕の首は簡単に折れた。そして彼は僕の肢体――この場合、もう死体なのかもしれない――を抱いて泣くのだった。そして、ひとしきり泣いたあと、あの鼠にしたように僕を切り刻んで恍惚に耽る……僕にはこれはとても幻影とは思えなかった。未来の構図であり、ある種の不思議な、予知であるように思えた。

彼はきっと取り繕うとしたのだろう。笑顔を見せたが、それすらも恐ろしく思えて僕は彼の部屋を転がり出た。その日は窓にすら鍵をしっかりかけて、布団を被り、日が差すまでガタガタふるえて過ごした。

それから、僕はすっかり彼とは縁を切った。彼のほうも、僕に悪いと思ったのか近寄ろうとしたなかったので、自然と疎遠になり、彼とは完全に他人となった――はずだった。

長いこと独り身だった僕に恋人が出来たのは、社会に出てからだった。新聞社に勤めはじめた僕に、とてもよくしてくれた違う課の同期だった。僕はわりとのんびりとした文化欄担当の記者だったのだけれど、彼女は新世代の女性というやつで、社会の担当記者で、何か事件があると聞くとほうぼうに走り回っていた。彼女は貧しい家の出を恥じていたが、そんな事は関係なく僕は彼女を愛していた。じきに結婚するつもりだった。そんな折、僕の家の郵便受けに入っていたのがこの手紙だった。

『前略……お久しぶり、宮野くん。僕を覚えているかい。美智雄だ。君の活躍は風の便りに聞いている。最近の僕はといえば……（中略。まわりくどく現在ある大学の研究室で働いている旨が書いてあった）……君に逢いたい。君はやはり、僕の至上の恋人なのだ』

僕のこの手紙を受け取ったときの戦慄を、想像していただけるだろうか！　僕は得体の知れぬ気味の悪さに、ぬめぬめとした触手を

背中に這わされているような心地さえした。
――美智雄はまったく鬼であった。彼は、その機知と財力とで、僕にあらゆる恐怖を与えたのだから！

「どうしたの？」
彼女が話しかける声すら、あの美智雄の声に聞こえた。どうしたの、宮野くん――彼はよく、僕を気遣ってこう言っていた。相変わらず彼からの手紙は途絶えることがない。『元気にしているようだね。僕は、君が動いている様子を見るだけで、ずいぶん嬉しいんだ。単純な男だと笑うかい』『君の幸せを祈る。しかし君にあの女性はふさわしくないだろう』『近いうちに会いに行くよ――』近いうちに――この手紙を貰って以来、宮野は後ろにずっと何かがつけているような気がしてならないのだった。
「きみ、僕の後ろに何か見えないかい」
「何か……？　見えないわよ」
「そうかい」
「あなた、疲れてるのね。なんだか顔色が悪いわよ」
「そうね――疲れているのかもしれないね」
深いため息をつく。眠れない日々が続く。美智雄は姿を見せることすらなく、それが却って不気味なのだった。

恋人が交通事故にあったと聞いたのはその翌日だった。
「案外わたしって間抜けね。大したことないから良かったけれど」
報せを聞いて、慌てて病院に駆けつけると、彼女は案外元気そうにからから笑っていたので安心した。命に別状はないが、脚を折っているのでしばらくは歩けもしないそうだ。
「よかった。君は働きすぎだから仏様が休暇を下さったに違いないさ」
「そう思わなきゃやってられないわねえ。いい機会だからゆっくり

休むとするわ」
　彼女は見舞いのバナナを剥き始めた。
「ところで、ひいた相手はどんな奴だったんだい。ずいぶん乱暴な運転だったと聞いたけれど……」
「それがわからないのよね……当て逃げよ。まったく不愉快だわ。もう」
「どんな人か見えなかったの？」

「サングラスとマスクをしていてよく見えなかったけれど――たぶん、あれ、若い男の人よ。色素の薄い髪をした――」

　僕の脳裏にある人物が浮かんだ。色素の薄い髪――美智雄だ！
美智雄が彼女を殺そうとしたのだ！
「君、本当に気をつけるんだよ。退院しても、油断しちゃあいけないよ……」
　彼女は怪訝な顔で僕を見て、それから、そんなに心配しなくても大丈夫よ。と笑った。

　病院からの帰途、そのこと、美智雄のこと、ばかりを考えていた。早足で駅から近道の公園を通り抜けようとする。「宮野くん」後ろから声がついてくる。「今日はずいぶん遅いんだね」「どこへ行っていたの？……」彼が姿を現す。あの頃と変わらない、背の高い、細面の美青年――「どこへ行っていたの？」もう一度彼が聞く。その姿は風に消えてしまった。また後ろで声がする――
　僕は何がなんだかわからなくなってしまって、それでも叫びだすほどおかしくはなれなくて、ただ闇雲に走って、家の戸を開けるとふるえる手で鍵を閉めた。名前を呼ぶ。あの、悪魔のような鬼のような彼の。
「美智雄さん……神戸美智雄！」
　声に呼応するように、窓がガタガタと揺れる。その音に目を向け

――目を瞠る。確かに鍵を閉めたはずだ。それでも目の前にいる人は――

僕は必死に走って、目の前が暗くなりそうなほどだというのに、彼の顔の白いこと。息もひとつだって乱れていない。薄い唇には笑みすら浮かべている。

「美智雄さん」

「帰ってきたよ。君のところに」

「あなたは――」

「置いていってすまなかったね」

「置いて――？　それは……」

僕は自分から彼の元を去ったのだ。決して置いていかれてなどいない。

「僕はかわいいものすべての命を絶ってきた。それは僕が鬼の申し子であるためだ。それは君にもわかっていただけると思う」

僕は彼の、鬼気迫る様子を思い出して頷く。

「僕は唐突に思い出した。僕は君をとてもかわいく思っていたのだと。そして僕はまだ君を切り刻んではいないと」

「美智雄さん……」

長く長く息を吐く。彼の乱れのない様子、大学の頃から少しも変わっていないすっきりとした姿を見て、僕は何もかもを思い出した。

彼はもうこの世の住人ではない。「いちばんかわいい」自分の喉を切って、死んだのだ。彼は自分自身に恋焦がれていたのだ。僕が見た彼の最後の姿は、敦盛様のようにお化粧をして、綺麗な着物を纏い、喉を掻き切った凄惨なものだった。

第三話

「嘘だ」

僕は口を開いた。

「美智雄さんが死んだなんて嘘だ。彼は僕を一番に愛していたはずだ」

途端にさまざまな記憶が頭を駆け巡る。君が好きだ、と言った唇。伏せられた睫毛。指はいつも芸術家のように白かった。「僕は君が好きだ、僕に似ているから」……「僕の趣味を知ったら君は軽蔑するだろうね。僕は自分を着飾るのがいちばん好きなんだ。よくよく女のように化粧をしては、夜の街に出かけているのだよ」……「僕は美智雄さんのことがいっとう好きですよ。そんなへんな遊びなんてやめてください」……「君にはわからないだろうね。この苦悩が。僕自身しか愛せないことが」……「誰に言われようとそれは変わらない」……「僕が好きなのは自分と――物言わぬ生首だけだ。そればっかりがいとおしい」……「この性癖は、僕自身でも不思議でならない」……「それでは、僕が生首になったらどうです」……「それはすばらしいだろうね」……

――ジリジリジリ――何かが焼ける音。美智雄はふたりいるようだった。優しい兄のような美智雄と、悪魔の使いのような美智雄。特異な性癖と美しい容姿で何人もの男女を自殺にまで追い込んでいた美智雄。そして彼自身は、彼の倫理や道徳に反して、その死体を愛してしまっていた。これはいけないことだ、これはいけないことだ、これはいけないことだ……そう口にするほど、もう一人の彼が増長する。渇望する。

発端は僕が実際に自殺を図ったことだった。死ねなかったが――彼は僕を見て青ざめて、「君、二度とこんなことはしないでくれ」と言った。「僕は確かに、奇妙な性癖を持っているよ――けれど、

僕はもう、人を殺したくはない。君なら、聡明な君なら、僕を甘やかさずにいてくれるだろう」「けれど、僕が死ななけりゃ、あなたは僕を愛さない」「まったくその通りだ――僕は、どうしたらいいんだろうね。ああ、どうしたらいいんだろうね」彼はしばらく僕の寝ていた病室をぐるぐるとせわしなく動き回って――そして決心したように動きを止めた。「僕なりに結論を出そう。君、つらいだろうが、僕の部屋に早朝来てくれ給え」

――ジリジリジリ――そして早朝、僕が目にしたものは例の美智雄の死体だ。『宮野君、驚いただろうが、どうか悲しまないでくれ。そう、僕は、僕自身の死体を一番に愛しているはずだ。僕が見られないことが残念でならないが、僕は満足そのものなのだ。唯一、きみがどうか健全な人生に戻れることを切望してならない』――ジリジリジリ――ジリジリジリ――

そうして僕は気を失って、目覚めたときにはすべてすべて忘れて、僕自身の妄想でもって美智雄の幽霊を作り出したのだ。美智雄が言う。

「君、連れて行ってほしいかい。僕のところに来るかい」

「いいや、行かないよ」

その瞬間、あんなにも纏わりついていたたくさんの美智雄は霧散して消えた。郵便受けに手紙が届くこともなくなった。僕は来春結婚式を挙げる。最近では、美智雄の存在そのものが、僕の妄想の産物ではないかと思えるのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9567f/

鬼

2010年10月8日15時16分発行